
[総合地域研究所 平成30年度「共同研究」報告]

佐倉市のインバウンド観光客誘致の為の コンテンツ作りと発信を通じた 研究・教育・地域貢献の体系化を目指して

代 表：村川 庸子 (敬愛大学国際学部教授)
副 代 表：山本 健 (敬愛大学国際学部教授)
研究分担者：田口 功 (敬愛大学国際学部教授)
佐藤 佳子 (敬愛大学国際学部准教授)
佐藤 邦政 (敬愛大学国際学部准教授)
大月 隆成 (敬愛大学国際学部講師)
学外研究員：上野 裕子 (佐倉市広報課長)
猪股 桂二 (佐倉市中央公民館館長)
高橋 修 (鹿島川土地改良区事務局長)

はじめに

敬愛大学と佐倉市の包括連携協定を基に、佐倉市とその周辺の近世史をたどる研修も4年目を迎えた。これまでに佐倉市内の武家屋敷や順天堂記念館、旧堀田邸や鹿山文庫(佐倉高校内)などの史跡訪問と、佐倉藩出身の農学者津田仙に関する資料調査・シンポジウム等を行ってきた。併せて近隣の佐原市や、今年度は野田市の関宿での研修も行った。

この共同研究に係わった村川・山本の関心から、佐倉の歴史を語る際に幕末から開国、明治にかけての近世、しかも蘭癖と呼ばれた堀田正睦の蘭学奨励からこれに係わる人の移動、明治期の元藩士の業績へとテーマは収斂してきていた。更に、今年度の関宿研修により利根川東遷という、近世以降の北総地域の発展を支えた事業について見聞することで、本研究により広い視野を得ることができた。関宿城博物館の最上階の展望台で、案内して下さった学芸課長の尾崎晃氏が言われた「ここは千葉の西北端だと言われていますが、実は関東平野のど真ん中なのです」という言葉が、以来何度も頭の中でこだまする。関宿城の天守閣を模した展望台から四方に富士山も筑波山も男体山も見渡すことができるのである。利根川水系の整備は想像を絶する大工事であるが、何度も失敗を繰り返しつつ、今の北総があり、そして印旛沼はその水系の中で周辺の村落の農業、飲料水と水運を支えてきた。未だ体系的にまとめるに至らないが、今後は個人的に佐倉市を中心とした北総の近世の歴史を考えていきたいと思っている。

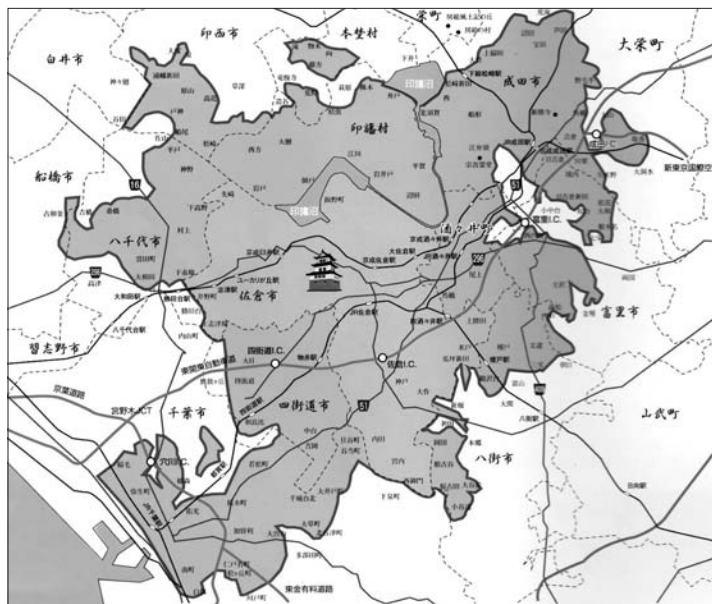
本年度は共同研究の助成決定が遅れたことなどにより、現時点までに訪れたのは、①野

田市関宿研修（2018年11月4日）と、②佐倉市における出張講座（12月15日於佐倉市中央公民館）の2件、そして実施が遅れているが2月に実施予定の③佐倉市研修である。「佐倉市のインバウンド観光客誘致の為の（多言語の）コンテンツ作りと発信」は今年度の共同研究のタイトルとなっており、このテーマは昨年4月に佐倉市役所の上野裕子氏らと相談の上、計画した。前年度までに作成した、留学生による中国語の佐倉市紹介はHPで紹介している。今年度の野田の研修までのコンテンツ作りは中国語のみ完成し、他の二言語によるものの作成を依頼している。研修後の指導にも相当の時間をかけており、佐倉研修の成果発表については諸般の事情で来年度に完成させることをご報告しておきたい。

来年度は研究助成の申請を行わないが、本稿では、これまでの活動によって得た知見をまとめ、今後の研究の方向性を示すに留めたい。

1 幕末の佐倉藩

佐倉市は千葉県の北部に位置し、人口約17万1,000人、習志野市に次ぎ県内10位となっている。現在の佐倉からは想像し難いが、人口は明治7（1874）年には銚子（1万7,688人）、船橋（9,494人）に次いで県内第3位（6,681人）。佐原（6,411人）、関宿（4,820人）、木更津（4,381人）、一之宮本郷（4,215人）、鶴舞（3,126人）、千葉（3,110人）、小見川（2,609人）と続く¹⁾。慶長15（1610）年の土井利勝の入封以来15代、佐倉城は関東東域を臨む要衝であり、徳川譜代の大名が次々に封じられている。この内、幕府の老中や大老に任ぜられた者は8名、幕末に老中首座としてハリスとの日米修好通商条約をめぐる交渉にあたった堀田正睦は2度、老中の職に就いている。正睦は藩政改革でも農業の振興や財政改革や教育改革などを積極的に行うが、中でも蘭学の砲術・医学への導入とそのための語学教育を奨励



旧佐倉藩領 投影図

（出所）『「佐倉・城下町400年記念 総州佐倉城」と題するパンフレット（2011年3月 佐倉商工会議所）所収の「旧佐倉藩領 投影図（安政年間）」より作成。オリジナルには当時の佐倉藩の城付き6万石の領土を現在の市町村図に重ねたイラストで、「一部実際と異なる」という断り書きが添えられている。

したことは特筆に値する。日本初の蘭方医院であり医学校でもあった順天堂を開設したことも広く知られている。

このパンフレットでは「印旛沼は、干拓以前は利根川とも結ばれ」、「現在の佐倉市ばかりでなく千葉市の都川河口域の江戸湾に注ぐ元寒川・登戸に佐倉藩唯一の外港」があり、これが現在の千葉港に発展したとされる。「廃藩置県後に、千葉県庁や裁判所、鉄道千葉駅などが置かれて千葉市の中心となった部分は、江戸時代の佐倉藩領の一部」であったという。現在の佐倉市の何倍もの広汎な領土である。往時が偲ばれる。

2 関宿研修——利根川・江戸川改修の歴史を辿る（2018年11月4日）

この研修では、まず野田市にある関宿城博物館を訪問し、尾崎氏に講演と館内の案内をいただいた後、博物館の裏にある関宿水閘門を見学した。その後、この地の舟運を利用した醤油産業の発達から近年のグローバル化までの歴史を辿るべく、「キッコーマンもの知りしょうゆ館」の見学を行った。

関宿は千葉県の最北西部、利根川と江戸川の分岐点に位置し、埼玉県と茨城県に接している。鎌倉時代から荘園の産物輸送の水運の発達で、交通の要衝として栄えた。家康の入封による江戸開府で利根川の水運は更に重要性を増し、江戸湾に注いでいた利根川本流を銚子沖に付け替える大掛かりな東遷事業²⁾が行われた。その分流として江戸川が開削され、渡良瀬川、鬼怒川、小貝川を利根川に合流させ、利根川水系の交通網が整備された。

近世日本では内水面を含む舟運が急速に発達し、物資の大量輸送を支えた。人口100万を超えた江戸の需要は西廻り・東廻り航路などで全国から輸送され、浦賀水道を経て江戸湾に入る航路をとっていた。幕末の異国船の到来は、廻船への妨害に対する懸念を生み、東北諸藩の年貢米を銚子湊まで運び、高瀬船で利根川から江戸に運ぶことなどが提案された。印旛沼も享保と天保の2度、干拓による新田開発が試みられたが、失敗に終わり、天保14（1843）年に3度目の工事を着工している。庄内藩など5藩が分担し、利根川－印旛沼、印旛沼－検見川間に運河を造成するもので、その目的は「江戸湾を利用しないバイパス的な水運コースの開発」であった。印旛沼工事は銚子から品川への運河造成を目的としていたが、8割ほど工事が進んだ段階で台風により掘割が破壊され、水野忠邦の失脚で中止される（藤田75-77）。

尾崎氏の指摘からは、この時期にこの地の流通構造が大きく変化したことが見えてくる。この地に特有のことなのか、他の地域にも見られることなのかは定かでないが、江戸幕府の統制の下、江戸と大阪の間屋商人が流通を支配する従来の機構が崩れ、農民は年貢・種籾以外の生産物を売却して塩・衣類・農具などを商人から直接購入し、藩は年貢などの一部を藩士に禄米として支給し、残りを江戸・大阪などの大きな市場に輸送・換金する。藩士は禄米の残りを領内商人に売却し、生活必需品を購入する、という形で、江戸周辺の商品生産・物流が活発化すればするほど、士農工商の身分制度の実体が崩れ、幕府の流通統制機構の弱体化が進んでいく（藤田83）。

関宿藩は領内統治の中心であった。3つの河岸－河川や運河の岸にできた港や船着場で、積み荷を扱う商人が集まり、蔵が立ち並び、市場が開かれる。茶屋や旅籠、遊郭、賭場などもでき（利根川・江戸川の結節点にあった関宿には利根川対岸の境河岸、江戸川沿いの内河岸、対岸の向河岸が置かれ、向河岸には水番所も置かれた）、大いに賑わったという。日光東往還

の宿場であり、また関宿に関所が置かれたことから水陸両面の交通の要衝となった。

このように物流の中心として栄えた関宿だが、明治以降、伝馬・助郷制度の改革・廃止や民間会社による対価賃銭支払制度への移行、河岸問屋中心の経営から半官半民の内国通運への経営委託（後に自由競争へと転換）や鉄道の敷設や蒸気船の導入などにより急速に経済構造が変化していく。蒸気船通運丸の運航開始により東関宿・西関宿・東宝珠花・岡田に寄航場が設置され、利根川上流と東京を行き来する荷物や人の中継地点となる。明治17（1884）年に開通した高崎線の影響で取扱荷物が減少、利根運河の開通で舟運の中継地としての役割も減じ、町は次第に賑わいを失っていった。

他方、近隣の町が発展していく。通運丸の運航で東京や銚子への旅客数、関東各地からの来訪者が急増したのは野田であった。醤油醸造業の発展に伴い町は発展、引き続き醤油の輸送手段として舟運の利用は続く。明治44（1911）年、野田－柏間に千葉県軽便鉄道が開通。野田町駅を中心に交通の要衝として発展する。

利根川水運の衰退で一時衰退した関宿だが、現在は住宅が建ち並び、工業団地ができるなど、再び活気を取り戻しつつある。周囲に高い堤防も完成し、洪水の被害もなくなった。訪問した関宿城博物館はスーパー堤防の上に建つ。高層ビルの少ない地域で、かつての天守閣を模した建物は『千葉のモンサンミッシェル』と呼ぶ人もいるのですよ」との尾崎氏の説明があった。

この後、尾崎氏に館内をご案内いただき、その後、博物館の裏にある関宿水閘門を見学した。こちらに関しては4年生の留学生王堯玉さんが日本語と中国語の両方で紹介文をまとめているのでご参照いただきたい。

日本語：http://www.u-keiai.ac.jp/international-news/34_5c1203958af07/upload/20181213-161524-4823.pdf

中国語：http://www.u-keiai.ac.jp/international-news/34_5c1203958af07/upload/20181213-161524-9175.pdf

尚、今回の研修に参加した佐藤邦政氏のコメントも添えておきたい。

千葉県立関宿博物館では江戸川と利根川の流頭部にある関宿の歴史と地理的特徴について話を伺い、その後、関宿の水門まで徒歩で見学をしました。関宿が水運で発達した街であり、歴史的に東北地方と関東地方をつなぐ要衝地であったことや、川沿いゆえに洪水の被害に何度も悩まされ灌漑対策が行われていたことや、水運から陸運に移り変わるとともに街が縮小していったことなどについて、興味深く伺うことができました。午後は、野田の醤油工場を見学し、千葉県の醤油の生産量が全国一であること、今では世界のさまざまな料理に使われていることを知りました。

私は千葉県出身ですが、千葉県の一番北にある関宿という場所を知ったのは今回がはじめてで、千葉の新たな魅力の可能性に気付かされました。関宿を「モンサンミッシェルのように」と評した訪問客の発言は非常に示唆的でした。関宿のような地域資源をいかに人々に伝えていくのかという問題は、歴史的視点だけでなく、それをいかに表象し再現するのかという表象文化的視点を取り入れて考えることが、地域創成としても学問的にも興味深い問題であると思われるからです。

2018年関宿研修から学んだこと 山本 健

ここ4年、佐倉市に関する「魅力の発見」に力点を置いて様々な企画を立ち上げ、研鑽を積んできた。私自身も2017年度佐倉市民カレッジ公開講座「佐倉の国際性——津田仙から梅子へ」(3月12日)にパネラーとして参加し、佐倉藩(堀田正睦)が係わった『日本近世史』の再評価(井上)と、その掘り起こしこそが佐倉市の豊かな「魅力」の根幹になるのではないか、と思うに至った。もちろん、佐倉市にはそれ以外に多くの「魅力」があることを認めながらも、それぞれの「魅力」が孤立してはいないか、それらを総合化ないし収斂できる視点はないものかと村川共々、その「視点」探しに苦戦してきた。こうした中、今回の「2018・関宿研修」は「佐倉市」を広く北総全体の中に相対化して位置付けるとどう評価できるのか、と発想を転換し、具体的に佐倉市の印旛沼と繋がる利根川を視野に入れての研修であった。

そこで、私たちが目を付けたのが千葉県野田市に位置する関宿である。関宿は、今でこそ鉄道や道路などのアクセスが不便であるが、かつては利根川と江戸川の分岐点に位置し、船運による物流の要衝であった。この河川の重要性こそが、地域間を結ぶ主要な手段を鉄道や道路に求めがちな私たち現代人の盲点であったのではないか。関宿に行って、まさに目から鱗が落ちた気がした。今回の研修では、道路(自動車)や線路(汽車)の普及以前の社会では、当たり前だが、水運業が物流の基幹であったことを思い起こさせ、佐倉市(印旛沼)も利根川及び水運業と係わらせて相対的に理解すると、どのように評価できるのか。このような視点に立てば、佐倉市の「魅力」を「孤立」したものとしてではなく、必然的に周辺部との関連でも捉える必要が生まれ、従来よりも捉え方の点で大きな前進をみたように思われる。これが私にとっての「2018・関宿研修」成果の1つ目である。

研修成果の2つ目は、関宿と野田の発展の違いから、一般論として近接する2都市の関係を考える際、各都市に備わる地場産業の有無に着目するという分析視点である。すなわち、これといった地場産業がなく、交通手段の近代化(船運→鉄道・トラック)に伴って町も縮小した関宿と、それとは対照的に地場産業(醤油産業)があるがゆえにその運搬手段(船運送)を守って、産業都市として生き残った野田との対比である。

上記の2つの視点(相対化、地場産業の有無)を自分の専門(ドイツ中・近世都市史)に引き寄せると、以下のような結果を導き出せよう。

まず、分析対象はヨーロッパ(ドイツ)の人口膨張期たる12~13世紀、その当時北部ドイツのエルベ河下流域に位置し、ハインリッヒ獅子侯の支配下にあった2つの「集落」を問題にしたい。その1つは、東部植民をめざすドイツ人と、エルベ河を挟んで対置する形で居住するヴェンド人(北西スラブ人)との交易のためにエルベ河沿いの乾燥高地(ゲースト)にハインリッヒが作らせた市場町バルドウィク(Bardowiek)。2つ目はバルドウィクの近くに位置し、岩塩を基に製塩業で潤うリューネブルク(Lüneburg)市。確かに、市場町バルドウィクはエルベ河以東から来た商人たちとの交易(商品は毛皮や鯨など)で非常に賑わっていたが、しかしそれも一時のこと。本格的に東部植民活動が始まる12世紀以降、その国境もエルベ河から更に東に移り、それに伴いエルベ河以東にも大きな司教都市が建設される(ハンブルク市[1189年]、リューベック市[1159年])。その結果、対バルト海交易の拠点はバルト海に接するハンブルク市やリューベック市に移行し、今ではバルト海から遠く離れ、商人たちから敬遠されだしたバルドウィク市場町は、1157年に火災という不幸も

あつてか、衰退に向かう。これに対して、岩塩を基にした製塩業（地場産業）を有するリューネブルク市はバルト海地域からドイツ内陸に運ばれる塩漬け鰯に不可欠な塩（＝岩塩）産業のおかげで生き残り、今日でも塩の街として存続している。

このように、個人的な研究の点でも、古今東西において、都市をはじめとする「大集落（住民）」の維持のためには、西欧諸国の近代経済発展も示しているように、物作り産業がいかに重要であるのかを教えられた研修であった。

3 出張講座「明治150年 津田梅子・佐藤志津に学ぶ

～国際社会に向き合う女性たち～（12月15日 於：佐倉市中央公民館）

幕末の佐倉藩は堀田正睦の下、蘭学の導入・推進を図り、砲術・医学の分野のみならず、藩士の蘭語の修得も推奨する。彼らの中には蘭語から英語を学ぶ者も現れ、藩の枠を超えて開国・維新から明治期に活躍する者を多く輩出している。その一人に農学者津田仙がいる。

敬愛大学出張講座「明治150年」
 津田梅子・佐藤志津に学ぶ
 ～国際社会に向き合う女性たち～
 2018.12.15 SAT.
 SAKURA, CHIBA
 日時：2018.12.15(土) 13:15～16:00 (開場：12:45)
 会場：佐倉市立中央公民館 大ホール
 プログラム
 ◆講演1：「現代に生きる津田梅子からの学び」 講師：大類久恵氏(津田塾大学英文学教授)
 ◆講演2：「私立女子美術学校を支えた佐倉出身の母人、佐藤志津の生涯と功績」 講師：高橋尚子氏(女子美術大学歴史資料学芸員)
 ◆オープンディスカッション
 進行役：村川雄子氏(敬愛大学国際学部教授「明治の女子教育と千葉」、質疑応答)

敬愛大学出張講座 チラシ

入り入れられ、(若い方は少なかったが)170名余りの聴衆も通常よりも女性が多かった。本稿では、ディスカッションのとりまとめをした村川の「明治の女子教育と佐倉」の内容をまとめておきたい。

明治の女子教育と佐倉

明治33(1900)年、専門教育を目指す3つの女子高等教育機関が誕生する。女子美術学校、女子英学塾、東京女医学校(現東京女子医科大学)である。女子美術学校を創立した横井玉子(1855-1903)は「女子の職場を確保し、女性の自立を図りたいとの思いから学校を建てたのです。その思いにいささかの後悔もありません」という言葉を残している。佐藤志津(1851-1919)は創立直後に経営難に陥ったこの学校を、横井に代わり支えることになる。官立の美術学校には女子の入学が認められない時代であった。津田梅子(1864-1929)は卒業式のスピーチで「先生をするのであれ、主婦になるのであれ、どのような方面の仕事をするのであれ、高尚な生活を送るよう努力してください。古い時代の

本研究では、大学と佐倉市の包括連携協定を基に4年間にわたり、彼に関する研究を進め、過去2回のシンポジウムを共催してきた。これまでは市の企画に協力する形で活動を続けてきたが、今年度は大学側主体ということで、「出張講座」の形をとることになった。但し、佐倉に関係のある二人の女性を取り上げることが提案されたのは企画政策課の上野氏(現広報課長)であり、「佐倉の当時の女性のDNAが世界に羽ばたいた事例として、特に佐倉の若い女性を元気にしたい」という言葉に応じたものである。

この二人の女性が創設に係わった、専門教育を目指す女子高等教育機関である女子美術学校(現女子美術大学)と女子英学塾(現津田塾大学)について、津田塾大学教授大類久恵氏と女子美術大学学芸員高橋尚子氏の二人に講演をお願いした。会場では手話と速記が採

狭量さ、偏屈さを皆さんから追い払い、新しいことを求めつつ、過去の日本女性が伝統として伝えてきたすぐれたものはすべて保つ努力をしてください」と語っている。どちらも目指したのは教員の育成であった。未だ初等教育の制度も十分に発達していない時代に専門教育を目指す。日本が近代国家として歩み始めたばかりのこの時代に、このような女性が現れ、それを支えた人々がいたということの歴史的な意味を考えてみたい。

まずは二人の女性を生み出した佐倉の文化的風土について触れておきたい。

18世紀末以降、多くの藩が藩政改革の一つとして取り組んだのが藩士の教育であった。佐倉藩は他藩に先んじて蘭学を奨励したことで知られる。藩主堀田正睦は「蘭癖」とあだ名されるほど熱心に蘭学奨励に力を入れる。幕府で2度にわたり老中に就任し、ハリスとの開国交渉にあたり日米修好通商条約締結に道を開いた人物である。「蘭癖」というあだ名も早坂千代は「後国事に参与することになった外交思想を考えるに、その（個人的志向の）域を脱していた」³⁾と述べている。正睦のハリスとの交渉などについてはここでは触れないが、彼がこの役割を果たすことができたのは蘭学を通して世界の情勢に関するアクセスを得ていた——それは彼が幕閣の高位にいたことで更に強化されるのだが——ためであり、それによって西村茂樹、木村軍太郎ら佐倉藩士に国政で活躍する機会が与えられることになる。

佐藤志津は正睦が佐倉に招いた順天堂の佐藤泰然の後継者佐藤尚中の娘で、堀田正睦の娘の傍らに仕え、当時の女性としては高い教養を身につける。夫の進は後にドイツに留学している。津田梅子は元藩士津田仙の娘であり、父が佐倉を離れた後、江戸で生まれている。明治4（1871）年、北海道開拓使派遣の5人の留学生の一人として渡米する。船中で7歳になったという幼さであった。二人共、元々佐倉生まれではないが、後述する通り、このような人々を包摂していったところに佐倉藩の開明性が見られるように思われる。

（1）佐倉と「洋学」の展開

佐倉藩の場合、幕末の「洋学」奨励が地域を超えるネットワークの拡がりをもたらしたことは特筆に値する。

先述の通り、佐藤泰然が佐倉藩に召し抱えられ、江戸から移住したのは天保14（1843）年のことである。その後、病院兼蘭学医学塾佐倉順天堂を開設し、当時最先端の医療を行うと共に、多くの人材を育てた。養子に迎えた尚中（志津の父）をはじめ、多くの門弟を長崎に留学させ、尚中の帰国後は大阪の緒方洪庵の適塾を超える医学塾となり、全国から学生を集めている。泰然は嘉永6（1853）年には正式に藩士に取り立てられた。

嘉永4（1851）年には手塚律蔵（元瀬脇寿人 元長州藩士）が佐倉藩に出仕し、藩校で西洋学を教えると共に蘭書の翻訳にあたる。1856（安政3）年江戸の蕃書調所の教授手伝いとなり、同じころ、本郷元町に又新堂という私塾を開く。塾頭は西周、中浜万次郎から『初級英文法教科書』を借用、又新堂から出版している。その下で、西村茂樹、津田仙、木戸孝允、神田孝平、杉亨二、新島襄らの塾生が学ぶ。西周も著名な教育者であり啓蒙思想家だが、洋学を学ぶために津和野藩を脱藩しており、手塚が義弟として佐倉藩に出仕できるよう取り計らい蕃書調所教授手伝並となる⁴⁾。

佐藤、手塚、いずれも尊王攘夷の動きから匿われるように佐倉藩に召し抱えられた人々であり、彼らが藩の内外を問わず、次世代を育てる役割を果たすことになる。このような形で実力を磨いていった幕臣の多くが明治政府の官僚になっていく二つの政体の継続性に

も注目したい。他方で、藩士の国内外への留学も積極的に推奨される。天保年間には蘭学は未だ医学・砲術・兵学に限られていたが、弘化・嘉永の頃には大阪の適塾で医学を、砲術では高島秋帆、江川太郎左衛門の下で学んでいる。佐久間象山の下には西村茂樹、木村軍太郎をはじめ10余名の佐倉藩士が送られている。

津田梅子を支えた人々が父津田仙（1837 - 1908）の人脈であったことも注目したい。まず、父親の仙であるが、慶応3（1867）年に、南北戦争後の余剰軍艦の購入を目的に小野使節団の翻訳官として渡米している。この渡米の折に使節団を米国で受け入れたのが、後の伊藤博文内閣で初代文部大臣になる駐米公使森有礼である。女子教育への関心が高く、日本の近代化には女子教育が重要であるという立場から、梅子ら女子留学生の派遣を同郷（薩摩藩）の黒田清隆北海道開拓使長官に勧めたのも森だと伝えられている。森は慶応元（1865）年に薩摩藩第一次英国留学生として英国に密航留学、渡航先で出会った新興宗教家トマス・レイク・ハリスに共鳴して渡米、彼の教団での共同生活を送り、薩摩藩からの米国留学生も受け入れている。仙がこの米国渡航で農業と教育への関心を抱くのも森の影響が強かったのではないかと思われる。帰国後、森は西村茂樹らと明六社を設立し、福澤諭吉、中村正直、西周、仙、等がこれに加わる。梅子ら女子留学生を受け入れたのも森であった。梅子が預けられたのは日本弁務館書記で森の著書の翻訳を委ねていたチャールズ・ランマン家、森が梅子らの世話を任せたのが、又新堂で仙と学んだ新島襄であった。

今一人、佐倉藩士で仙と梅子の両方に係わった人物についても触れておきたい。啓蒙思想家で教育家の西村茂樹（1828 - 1902）である。儒学を安井息軒、大槻盤溪、洋学を佐久間象山、木村軍太郎に学ぶ。又新堂にも籍を置いている。嘉永6（嘉永1853）年のペリー来航の折に堀田正睦に意見書を提出し、老中阿部正弘に海防策を献じている。安政3（1856）年の堀田正睦の老中首座就任に際し、西村は外国事務取扱に、後に貿易取調御用掛となっている。1868（慶応4）年には、佐倉藩年寄役として藩政改革に取り組み、明治4（1871）年には印旛県権参事に。明六社（森有礼ら）に参加すると共に文部省に勤務、教科書編纂に携わる。明治9（1876）年には東京修身学社（1987年、日本弘道会に改称）を設立している。明治17（1884）年、宮内省に勤務、天皇に洋書を進講している。明治23（1890）年には貴族院議員に就任している。華族女学校（後の学習院女子中・高等学校）校長着任の折には津田梅子を教員に迎え入れ、彼女の2度目の留学に際しては、休職扱いとした上で渡航費用の心配もしている。

西村は極端な欧化主義的風潮を憂慮し、伝統的儒教を基本に西洋の精密な学理を結合させるべきだと主張したと言われている。印象の域を出ないが、仙も梅子も、森や福澤よりも西村に共感を寄せていたのではないかと思われる。西村の女性教育論はしばしば福澤のそれと比較され、儒教的伝統的ということで、開明的開発的な福澤と対比されることが多い。だが、この二人の教育家の、独立国家にふさわしい国民育成と女性教育の意義についての関心は共通であり、福澤が学問をすすめ、兵学を除く西洋諸科学はすべて女性に有用であると説いたのに対し、西村は徳育により啓発された新時代にふさわしい女性の出現を希望している。

（2）女子美術学校と女子英学塾

最後に、女子美術学校と女子英学塾という時代の先端をいく女子高等教育機関設立に向けた人的なネットワークについて見ておきたい。女子美術大学は肥後新田藩の横井玉子の

創立になる。横井小楠の甥佐平太と結婚し、佐平太が設立に係わった熊本洋学校に通い、英語や洋裁、西洋料理を学ぶ。佐平太の死後、上京し、海岸女学校などで教員となる。この頃、佐倉出身の浅井忠に水彩画と洋学を学んでいる。女子美術学校を創立するが資金面から経営難に陥り、順天堂院長婦人佐藤志津に協力を要請する。横井の病没後は佐藤志津が校長となり、財務面から支えていく。

志津自身は留学の経験はないが、夫進（1845 - 1921）は明治2（1869）年にドイツに留学し⁵⁾、博士号を取得して帰国しており、帰国後直ちに尚中の後を継いで院長になっている。佐倉市での出張講座の高橋尚子氏の講義の中で、最も印象深かったのが進の留学中の日記の、ベルリン郊外の臨時病院での経験に関する記述であった。高橋氏のレジュメから引用させていただく。

馬車に乗って病院に着いた女性2人が「清素（ママ）なる白き服」に着替え、患者の食事の世話や排泄介助まで行っていた。目新しく感ぜし奇異の一なり。（佐藤進著 山内英之助編『餐霞餘録』1919年）

戦時に働く女性看護師について日記に書き留めた佐藤進、米国の共学の小中学校を見学したことを後に『農業雑誌』にさり気なく触れた仙。やがて梅子と志津という二人の女性の社会進出を内側から支えることになる二人の海外での体験の大きさを指摘しておきたい。

同様に梅子の場合、女子英学塾設立に山川捨松（1860 - 1919）が果たした役割は忘れてはならない。会津藩出身で梅子ら4人と共に留学、内二人は早くに帰国しているが、梅子と捨松は11年を共に米国で過ごす。捨松は日本人女性初の米国大学卒業者となる。帰国後は参議陸軍卿・伯爵大山巖と結婚し、自ら日本の女性教育に携わることはできなくなったが、女性の高等教育機関設立には物心両面で支援している。伊藤博文の依頼により華族女学校の設立準備委員会に入り、梅子、アリス・ベーコンを教師として招聘している。また、女子英学塾設立は米国の人脈などを用いて全面的支援を行っている。女性の社会進出がまだ難しかった時代に、女性の高等教育を目指す二人を支援した人々の中に西洋文化の影響を受けた女性たちがいたことは、大学医学部の入学試験での女性差別が報じられる現在の日本と引き比べても、注目したい事例であった。

まとめにかえて

江戸時代の末期と聞くだけで人々の移動や情報の伝播が停滞した社会を思い浮かべてしまう。だが、佐倉藩の事例に関する資料調査でも、特に幕末にはダイナミックな人の移動と情報の流動性が見てとれる。佐倉藩では正睦を通して早くから黒船来航などの情報が伝えられていたはずだし、他方、地元でも蘭学から英学へ、医学・砲術・兵学などの理系の学問から、語学教育を通して政治・経済・社会・文化へと広い分野への「洋学」の奨励は、地元出身者間ばかりでなく、地域を超えるネットワークを生み出し、国際的な人材を育成していく。その拡がりエネルギーには圧倒される。近世の日本の閉鎖性を越えた佐倉の文化的風土が二人の女性を生み出す源になったことは明らかであろう。

（文責：村川庸子）

(注)

- 1) 関宿研修で関宿城博物館の尾崎氏にご教示いただいた千葉県の市町村の人口別順位（1874（明治7）年の『千葉県史 通史編 近現代Ⅰ』より）。1925（大正14）年には、①千葉 ②銚子 ③館山 ④市原 ⑤市川 ⑥船橋 ⑦佐原 ⑧野田 ⑨木更津 ⑩成田に（『千葉県統計年鑑〔昭和40年〕』）、2010（平成22）年には、①千葉 ②船橋 ③松戸 ④市川 ⑤柏 ⑥市原 ⑦八千代 ⑧浦安 ⑨習志野 ⑩流山（『千葉県統計年鑑〔平成23年〕』）。
- 2) 1853（嘉永6）年に徳川家康の命により、関東郡代伊那忠次により利根川東遷工事が開始される。
- 3) 早坂千代「幕末佐倉藩における洋学の展開」『駒沢史学』第19号、1972年3月。
- 4) 手塚は維新後、東京開成所教授を経て外務省に出仕し、1876（明治9）年、外務省7等出仕貿易事務官としてロシアのウラジオストクに出向いている。
- 5) 外務省史料の『本官勘合帳外国官一号』に「旅券第1号 佐藤進」と記録されている。だが、彼が1869（慶応3）年にベルリンに着いたとき、現地には既に山口の青木周蔵と土佐の萩原三圭が滞在していた。青木は木戸孝允の推挙で長州藩からプロシア留学の許可を得て、萩原は岩崎弥太郎の世話で土佐藩の留学許可を得て、ともに長崎から旅立ち、1868（慶応4）年にドイツに入国していた。それ以前にもドイツに医学留学した日本人に赤星研造と馬島（小松）済治がいる。二人とも藩からの留学生で、ハイデルベルグ大学に学んだ。

(参考文献)

- 井上勝生『幕末・維新』（シリーズ日本近現代史①）岩波新書、2006年。
 藤田覚『幕末から維新へ』（シリーズ日本近現代史⑤）岩波新書、2015年。

むらかわ・ようこ Yoko Murakawa
 やまもと・たけし Takeshi Yamamoto
 たぐち・いさお Isao Taguchi
 さとう・けいこ Keiko Sato
 さとう・くにまさ Kunimasa Sato
 おおつき・たかしげ Takashige Otsuki
 うえの・ゆうこ Yuko Ueno
 いのまた・けいじ Keiji Inomata
 たかはし・おさむ Osamu Takahashi